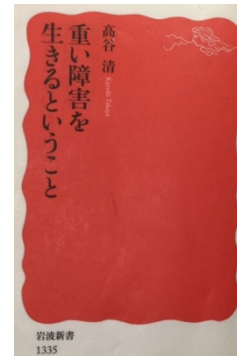


重い障害を生きるということ

7月26日の「津久井やまゆり園」の殺傷事件が頭から離れない。「第一びわこ学園園長」などを務めた高谷清医師による2011年10月刊行の岩波新書を手にした。本書カバー裏から一曲がった手足は意志とは無関係に緊張し、呼吸も思うにまかせない。はっきりした意識もないかに見える—こうした心身に重い障害のある人たちは、世界をどう感じているのか。生きがいや喜びは何か。長年、重症心身障害児施設に勤務する医師が、この人たちの日常を細やかに捉え、人が生きるということ、その生を保障する社会について語る。



はじめに・第5章の最後を紹介しよう。本書を執筆しようと思ったのは、多くの方に「重症心身障害」の状態での人生を生き、生活している人たちのことについて知っていたきたいのと、「ほんとうに、生きているのが幸せなのだろうか」という自分自身の問いでもあることに答えたいと思ったことからである。それは、人が「生きるということ」について、また人の「生きる喜び」、人の「生きがい」などについて考えていくことになる。それは、人間というのとはどのような存在なのか、どのような生きものなのかということ、さらに社会の在りようにも広がっていくと思うのである。

本書を通じて、重い障害のある人にとって、安心できる環境での生活がどんなに大事であるかを述べてきた。経験したことのない環境は、不安、恐怖を引きおこし、体調を悪化させ、死に至らせることさえある。

苦痛がなく、安心できる環境において、「からだ」自体が自分の存在は気持ちがよいと感じているであろう。ここに、生きているもっとも基本的な喜びがあるのだろうと思う。そのような状態にあるとき、周囲の人は、「死んだほうがましだ」とか、「生きているのはかわいそうだ」とは思わないのではないだろうか。気持ちがよい「からだ」は、「いのち」が気持ちよく存在していることであろうし、「こころ」も安心しているだろうと思う。そして、この人たちにとりくんでいる人たちは、自分もまた気持ちよく仕事をし、生活をし、生きているのが喜びを感じるのではないだろうか。

「生きているのがかわいそうだ」「生きているほうがよいのであろうか」ではなく、「生きていることが快適である」「生きている喜びがある」という状態が可能であり、そのことを実現していくことが、直接かかわっている人の役割であり、そのようなことがなされるように社会的なとりくみをおこなうことが社会の役割であり、人間社会の在りようではないかと思うのである。

(2016年8月13日)